

フィールドノートの向こう側 ―青柳昌宏の資料が教えてくれたこと―

たぐち きみのり
田口 公則(学芸員)

はじめに

2026年7月12日、ミニ企画展示「フィールドノートの向こう側―ナチュラリスト青柳昌宏の軌跡―」が最終日を迎えました。感想ノートには、「これを見たくて来ました」「最終日に間に合ってよかったです」といった書き込みが並び、青柳昌宏(以下、青柳先生)の資料を紹介する展示が実現できた喜びを感じました。しかし私にとって、この展示は一人の研究者を紹介するだけの企画ではなく、私自身の学芸員としての原点を改めて見つめ直す時間でもありました。本稿では、ミニ企画展示が実現するまでの経緯を振り返りつつ、残された貴重な資料を通して、一人のナチュラリストが記録に込めた思いを読み解き、そこから私が受け取ったものについて記してみたいと思います。

青柳先生を知ったきっかけ―盲学校での観察授業

私が、自分の原点となる青柳先生の「思想」に初めて触れたのは、ペンギン研究でも南極観測でもありません。学芸員になって間もない頃、筑波大学附属盲学校(当時)の理科の授業を見学したことが始まりでした。そこでは、生徒たちが動物の頭骨を手で触り、形や特徴を自分の言葉で語り合っていました。教師が答えを教えず、自ら観察し、考え、表現する授業です。視覚に障がいのある子どもたちが指先を頼りに骨の形を読み取り、生き生きと自分の言葉で議論する姿に、「ここに理科学習の本質がある」と私は大きな衝撃を受けました。

後に知ったのですが、この授業の礎を築いたのが青柳先生でした。その志は鳥山由子先生(以下、鳥山先生)へ、さらに武井洋子先生へと受け継がれ、現在もその実践が続いています。この授業の歩みは、柳楽未来氏の著書『手で見るとある不思議な授業の力』(岩波書店)や、NHKの番組『心が踊る生物教室』『心を拓く生物教室』で紹介されています。この授業との出会いは、その後の私の学芸員としての歩みに大きな

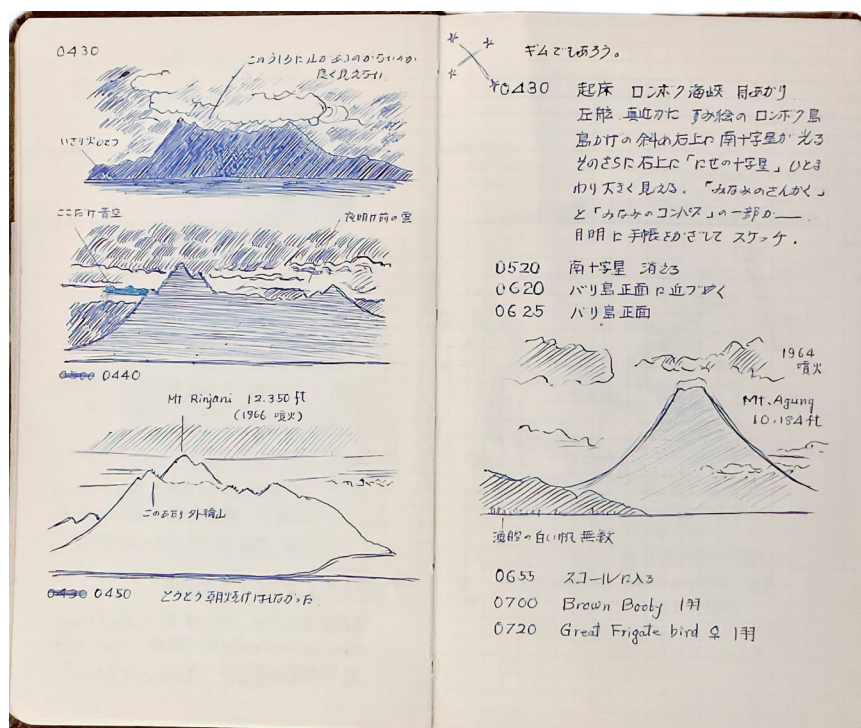


図1. ロンボク海峡通過時の記録 ― 青柳昌宏の野帳(1971年12月5日／内田啓子氏所蔵)。午前4時から5時まで艦橋に立ち、全身全霊でロンボク海峡を体感している様子が窺える。

影響を与えました。鳥山先生から青柳先生のお話を直接伺い、『探究―私のいた場所 青柳昌宏選集』(どうぶつ社)や『テオリア』(SEG出版)を読むうちに、私もその仕事に強く惹かれていきました。そして、ユニバーサルデザインの思想を取り入れた展示や教育普及活動に取り組む、私自身の原点になったのです。

青柳昌宏(1934-1998)は、生涯を通して自然を深く観察し、その魅力や発見を社会へ伝え続けたナチュラリストです。和歌山で昆虫観察に親しみ、大学では応用昆虫学や動物生態学を学びました。その後、理科教員となり、1970年に東京教育大学附属盲学校へ赴任しました。一方、南極地域観測隊ではペンギン研究に取り組み、「ネイチャー・フィリング」を提唱する等、研究、教育、自然保護を一体として実践しました。学生時代に雑誌『アニマ』やテレビ番組で知っていた「ペンギン研究者・青柳昌宏」と、盲学校の「教育者・青柳昌宏」が、同一人物だと知ったのは、その後のことでした。

青柳資料(アーカイブズ)との出会い

2023年12月、青柳先生のご長女・内田啓子さんからご自宅に保管されていた資料を拝見する機会をいただきました。机に並んだのは、大学時代のノート、細密スケッチ、高校時代のガリ版冊子、触察教材、野帳、家族へ宛てた手紙等、膨大な資料でした。資料を前にして驚いたのは、その量だけではありません。一枚一枚を見ていくうちに、そこには「一人の自然観察者が、何を見て、何を考え、どう伝えようとしたのか」という、観察と思考の軌跡が残されていることに気づいたのです。

私は、すでに同僚の大坪学芸員と企画展「自然史アーカイブズをひらく」の準備を進めており、その中で野帳一冊を紹介する予定でした。しかし資料を読み進めるほど、「これだけでは伝えきれない」という思いが強くなり、野帳を入口としながら青柳先生の歩みそのものを紹介するミニ企画展示「フィールドノートの向こう側」を、新たに企画することになりました。

一冊の野帳が投げかけた問い

展示の中心に据える資料は、最初から決まっていた。1971年12月5日、南極観測船「ふじ」で書かれた野帳のページです(図1)。夜明け前のロンボク海峡。薄暗い艦橋で、島影の変化が10分ごとに克明なスケッチとして記録されています。この野帳のページを手にした時、私は会ったことのないナチュラリストの背中を見ているような気持ちになりました。

「生物学徒たるもの、一度は船で通ってみたいウォーレスゆかりのロンボク海峡。フルにその通過を体験することこそ、得がたき幸せであり、」とあり、ページをめくると、そこには「ギムでもあろう。」と続いています。

わずか一語の「ギム(義務)」という表現。さらに興味深かったのは、この言葉だけが次頁にまたがって記されていたことでした。もちろん偶然かもしれませんが。しかし私は、その一語が強く印象に残るように書かれているようにも感じました。生物教員として初めて南極観測隊に参加する責任と、自ら現場に立って確かめる研究者としての使命。そのような覚悟が、この一語に凝縮されているように思えたのです。なぜ、これほど美しく、しかも見る者に伝わる記録を書けたのだろう。その問いが、展示を読み解く出発点になりました。

「読ませる文字」はどこで育まれたのか

揺れる船上で、しかも夜明け前の暗い艦橋で、なぜこれほど整った文字を書くことができたのでしょうか。その答えを探しているうちに、私の目に留まったのが高校時代に作られたガリ版冊子でした。青柳先生は、生物クラブの会報『粉高生物』のガリ切り(鉄筆でロウ紙を削って文字を刻む作業)を自ら担当していました。原稿用紙に書かれた文字と、鉄筆で刻まれた文字を見比べると、後者には「他人に読んでもらう」ことを意識した丁寧な文字づくりが表れています。

もちろん、これだけで野帳の美しい筆跡を説明することはできません。しかし、読ませる文字を書く経験を高校時代から積み重ねたことが、その後の記録にも生かされていたのではないかと。



図2. 南極ロス島バード岬から家族への手紙(1978年11月24日)にあるスケッチ。内田啓子氏所蔵。

が私の仮説です。

さらに興味深いのは、先生の野帳には単なる「自分のメモ」を超え、未来の読者を意識した工夫が、随所に見られることです。だからこそ半世紀を経た今でも、そこに残された観察の息づかいを感じ取ることができるのでしょう。

南極からの手紙

1978年、青柳先生はカンタベリー大学の招聘を受け、再び南極のロス島へ渡りました。多忙なバード岬での調査の合間にも欠かさなかったのが、日本で待つ家族への手紙でした。71日間の滞在中に綴られた手紙は18通に及びます。南極観測支援部隊のヘリコプターが飛来するたびに託したいと、時間を見つけては筆を執っていたようです(図2)。手紙は単なる近況報告ではなく、ペンギンの行動や自然環境の変化を克明に記した、現地の状況を伝える貴重な記録にもなっていたのです。「家族に、自分が見たものを分かりやすく伝えたい」。その強い思いがあったからこそ価値ある記録が生まれたのではないのでしょうか。この手紙は1981年、『ペンギン—南極からの手紙』(平凡社)として出版され、家族への私信が多くの読者に南極の自然を伝える一冊となりました。

残された私信の数々にも青柳先生らしさがよく表れています。観察し、記録し、人へ伝える。相手が家族でも、子どもたちでも、あるいは読者でも、その姿勢は変わりませんでした。青柳先生にとって「記録すること」と「伝えること」は、一続きの営みだったのだと思います。

未来へ受け継がれる観察

当初、野帳一冊を展示する予定でしたが、資料を読み進めるうちにそれは野帳だけの物語ではないと気づきました。野帳に残された観察は論文へ、家族への手紙は一冊の本へと結実し、そしてこれらの膨大な記録はアーカイブズとして新たな意味を持ち、今回の展示へと繋がっています。私は青柳先生に直接お会いしたことはありません。それでも、残された資料を通して、その自然への向き合い方や教育への思いを、今ここで学ぶことができました。

アーカイブズとは、過去を保存するためだけのものではありません。一人の観察者が世界を見つめたまなざしや考え方が、そこに残されています。それを読み解くことで、そのまなざしや情熱は世代を越えて受け継がれていくのだと思います。今回の展示を通して、私自身もまた、その静かなバトンを受け取った一人なのだと感じています。

最後になりますが、青柳先生の膨大な記録とそこに込められた熱意を紐解き、共にこの展示を作り上げる過程で、多大なるご支援と貴重な資料のご提供を賜りました内田啓子氏に、心より厚く御礼申し上げます。

【ミニ企画展示リーフレット公開のご案内】

本稿で紹介しきれなかったスケッチや、調査カード、ペンギンのスケッチ等の画像は、当館ウェブサイトで開催中の展示紹介冊子にてご覧いただけます。

<https://nh.kanagawa-museum.jp/exhibition/temporary/mini20260429.html>